

平成30年度
第2回さいたま市総合教育会議

議 事 録

1 期 日 平成31年3月28日(木)

2 場 所 さいたま市役所 議会棟2階 第7委員会室

3 開 会 午後3時30分

4 出席者

(1) 構成員

職 名		氏 名
市 長		清水 勇人
教育委員会	教 育 長	細田 眞由美
	教育長職務代理者	大谷 幸男
	委 員	石田 有世
	委 員	野上 武利
	委 員	武田 ちあき
	委 員	柳田 美幸

(2) 市職員

職 名			氏 名
都市戦略本部	本部長		真々田 和男
	総合政策監		松本 欣也
	理 事		高根 哲也
	都市経営戦略部	参事	中村 幸司
	リビ°ック・パ°リビ°ック部	参事	竹内 善一
ス°ーツ文化局	スポーツ部	ス°ーツ政策室 室長	高橋 伸一郎

職 名			氏 名	
教育委員会事務局	副教育長		久保田 章	
	管理部	部 長	矢部 武	
		教育政策室	室長	野津 吉宏
	学校教育部	部 長		平沼 智
		指導1課	課長	吉田 賀一
		高校教育課	参事 [兼] 課長	吉野 浩一
		生涯学習部	部 長	竹居 秀子

5 議題及び議事の概要 別紙のとおり

6 閉 会 午後5時00分

1 開 会

○事務局（都市戦略本部総合政策監）

定刻となりましたので、ただ今から、平成30年度第2回さいたま市総合教育会議を開催いたします。

はじめに、構成員の皆様の出席状況でございますが、本日の会議は、全ての方に出席いただいております。

次に、会議の公開の取扱いにつきましては、本日の会議は非公開とする内容はないと考えられることから、会議を公開したいと思いますが、よろしいでしょうか。

（「異議なし」との声）

○事務局（都市戦略本部総合政策監）

御異議がないようですので、本日の会議は公開とさせていただきたいと思っております。

2 市長挨拶

○事務局（都市戦略本部総合政策監）

それでは、会議の開会に当たりまして、清水市長から御挨拶申し上げます。

○清水市長

本日はお忙しい中、お集まりいただき誠にありがとうございます。

本年度の第2回さいたま市総合教育会議の開催に当たり、一言、御挨拶をさせていただきます。

本日の第2回の総合教育会議におきましては、議題の（2）にあります「市長部局と教育委員会の主な連携事業等について」有意義な議論をさせていただき、連携を深めていければと考えております。

私からの提案であります「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けたオリ・パラ教育の推進」では、これまでオリ・パラ教育を実施されておりますが、オリンピック・パラリンピック競技大会のレガシーの一つとしてボランティアへの取組についても是非とも教育現場との連携が必要と判断し選定させていただきました。

また、教育委員会からの提案であります「市立高等学校「特色ある学校づくり」計画の推進 浦和南高校のPLAN THE NEXT スポーツを科学

する生徒の育成」につきましては、社会で活躍できる人材を育成するために、スポーツを科学する取組を通して、課題分析能力や判断力などを高める有効な取組であると認識しているところでございます。

いずれの議題につきましても、忌憚ない御意見を賜りたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

○事務局（都市戦略本部総合政策監）

ありがとうございました。

それでは、本日の議題に入りたいと存じます。

本会議の主宰は清水市長でございますが、形式的な進行については、事務局が行うこととされておりますので、私の方で進行させていただきます。

まず議題（１）「平成３０年度第１回会議における意見・要望等に関する取組状況について」でございます。

第１回会議における御意見、御要望への対応について、資料１により御報告いたします。

3 議題（１）平成３０年度第１回会議における意見・要望等に関する取組状況について
--

○事務局（都市戦略本部総合政策監）

資料１により御報告申し上げます。「平成３０年度第１回会議における意見・要望等に関する取組状況について」ですが、大きく申し上げますと２点ございます。

１つ目が「さいたま国際芸術祭２０２０における教育機関等と連携したプロジェクトの展開について」、２つ目が「改正民法「１８歳成人」に向けた「主権者教育」「消費者教育」「キャリア教育」の推進について」でございます。

１つ目の「さいたま国際芸術祭２０２０における教育機関等と連携したプロジェクトの展開について」では「芸術家の方々と子どもたちが共に作品を作るアート・イン・スクールを一緒にやってほしい」、「先生方や子どもへのサポート体制を充実のうえ、参加を募ってほしい」、「多種多様な芸術活動に取り組んでいる方を派遣してほしい」などの御意見、御要望をいただきました。

これに対しましては、学校等への周知、説明を実施しながら、学校からの要望に応じた多様な芸術活動に取り組むアーティストを派遣し、アーティストによるレクチャーやワークショップを実施してまいります。

次に、２つ目の「改正民法「１８歳成人」に向けた「主権者教育」「消費者教育」「キャリア教育」の推進について」では、「現場で働いている人たちの

仕事の楽しさと大変さの両方知る必要がある」、「国や県で行っている取組との連携も模索してほしい」などの御意見、御要望をいただきました。

これに対しましては、「卒業生による体験談を在校生と共有する場を設けること」、「関東経済産業局や創業ベンチャー支援センターなどとの連携」を検討しているところでございます。

それでは、ただいまの件につきまして御意見、御質問等がございますか。

(意見なし)

4 議題（2）市長部局と教育委員会の主な連携事業等について

○事務局（都市戦略本部総合政策監）

続きまして議題（2）「市長部局と教育委員会の主な連携事業等について」でございます。

はじめに、「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けたオリ・パラ教育の推進」について、オリンピック・パラリンピック部から説明をお願いします。

○オリンピック・パラリンピック部参事

「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けたオリ・パラ教育の推進」について御説明いたします。

資料2の2ページを御覧ください。

大会の概要ですが、資料上段にそれぞれの大会正式名称を記載しております。

一般的には、上の帯の部分に記載しておりますとおり、2つの大会を総称して、「東京2020（ニーゼロニーゼロ）オリンピック・パラリンピック競技大会」、もしくは「東京2020（ニーゼロニーゼロ）大会」と呼んでおります。競技日程、選手数、競技数等は御覧のとおりとなっております。下段の観客数については、オリンピック・パラリンピックをあわせて約1,000万人程度を見込んでおります。

3ページを御覧ください。

こちらは、埼玉県内で開催される競技会場と競技日程になります。

本市が会場となりますのは、オリンピックの2競技で、さいたまスーパーアリーナではバスケットボールの予選から決勝までの男女全試合、埼玉スタジアムではサッカーの男女予選を中心として男子の3位決定戦まで開催されます。その他、川越ではゴルフ競技、朝霞ではオリンピック・パラリンピックの射撃競技がそれぞれ開催されます。以上が大会の概要です。

4 ページを御覧ください。

おもてなしアクションプランと教育委員会の関連について御説明いたします。

本市では、東京2020大会の国内外からの来訪者のおもてなしに向けて、4つの方向性から成るおもてなしビジョンを策定し、その方向性に基づく12のテーマを選定の上、テーマに基づく取組をアクションプランとしてとりまとめ、官民で推進しているところです。そのテーマのうち、特に、オリ・パラ教育の推進とボランティア検討、事前合宿・ホストタウンが教育委員会に係るテーマとなります。

5 ページを御覧ください。

教育委員会ではすでに、オリ・パラ教育実施方針の策定や東京2020教育プログラム「ようい、ドン！」の実施など、御覧のとおりオリ・パラ教育の推進や事前合宿・ホストタウン事業に取り組んでいただいているところでございます。今後は、ボランティア検討に関する事業について更なる推進の御協力をお願いしたいと考えています。1人でも多くの市民がボランティア活動を通して東京2020大会に参画することで、大会を創り上げた経験や記憶をレガシーとして残してもらい、ボランティア文化の定着に繋げていきたいと考えています。

6 ページを御覧ください。

大会期間中に埼玉県で実施するボランティアの概要について御説明いたします。

まず、①の都市ボランティアについては、本市も参画する埼玉県推進委員会において、2020年4月1日時点で18歳以上の方を対象に採用を行い、主に競技会場の最寄り駅において観戦客への案内を行います。

続いて②の「子ども向けボランティア体験プログラム」についてですが、小学生から18歳未満までの、児童生徒を対象に、東京2020大会を、世界の人々と直に触れ合う貴重な場としていただくために、都市ボランティアを体験できるプログラムの実施を予定しています。

具体的な募集要件や活動内容は今後、ボランティアワーキング・グループにて検討していく予定です。

7 ページを御覧ください。

大会前から大会期間中に実施する市独自ボランティア「さいたまマスター2020」について御参考までに情報提供いたします。

ただいま御説明いたしました都市ボランティアとは別に、市独自ボランティアとして観戦客等をおもてなしする取組を検討しています。

独自ボランティアは、主に都市ボランティアとは異なる活動機会を提供する

ことを目的として、既存の市内活動団体を中心に「さいたまマスター2020」を組織し、観光地周辺での案内や、環境美化活動を行います。

8ページを御覧ください。

連携を希望する内容について御説明いたします。

1点目に、ボランティア活動を通じたボランティアマインドの育成についてです。ボランティアマインド育成のため、小中高生に対して、ボランティア活動の意義などを伝える時間を設けていただき、例えば、ボランティアの語源は自発性からきていることや、自らが楽しむための活動として行うものであるといったことを伝えていただいた上で、ボランティア活動を行っていただきたいと考えております。

ここでは活動例として、クラス内でのレクリエーション係などの係活動やあいさつボランティア活動、校内外の清掃活動など1例を挙げておりますが、その他に、既に行われている活動や、それぞれの地域において行われている清掃や飾花活動に参加していただくなど、幅広い分野を対象に活動を行っていただきたいと考えています。

本取組を東京2020大会に向けて、継続的に行って頂き、気運醸成を図りながら、ボランティアマインドの育成を図っていただきたいと考えています。

9ページを御覧ください。

2点目として大会期間中に実施予定の「子ども向けボランティア体験プログラム」への参画についてです。

資料では、募集方法や活動内容等に関する当部の案をお示ししています。

具体的な内容については、埼玉県推進委員会ボランティアワーキング・グループの中で、当部の案を出しながら今後検討を進めて参ります。

先ほどの1点目の連携により育成されたボランティアマインドが発揮できる機会としたいと考えていますので、詳細が決まりましたら改めてお知らせいたします。

ひとりでも多くの小中高生の参画に繋がりますよう、周知・啓発等に御協力いただきますようお願いいたします。

10ページを御覧ください。

今後のスケジュールについてご説明いたします。

ボランティアマインド育成のための取組については、来年度より適宜実施いただき、子ども向けボランティア体験プログラムについては、4月よりワーキング・グループでの検討が始まります。

この2つの取組を通して、ボランティア活動の活性化やボランティア文化の定着というレガシー創出につながるよう取組を推進していきたいので、よろしくようお願いいたします。

私からの説明は以上になります。

○事務局（都市戦略本部総合政策監）

ただいまの件につきまして、清水市長から補足などございましたらお願いいたします。

○清水市長

ボランティア教育の充実と言うと、ボランティアで自発性というのが前提にあると思いますが、ボランティア教育、ボランティアに参加するということが、道徳心であるとか公共心であるとか、生きた道徳の授業という感じもしますし、自発的にやることで、普段、教室の現場の中では体験できない、あるいは感じることをできない、貴重な様々なことが学べる機会ではないかなと思います。

大会前に行うことの中で、活動例で、学校内でのいろいろな諸活動だろうと思いますが、オリンピックまでということを見ると、これ以外にも夏休みに社会福祉協議会が行っている自己発見ボランティア体験があったり、あるいはさいたまクリテリウムであったり、マラソンであったり、対象となるのは小中高ぐらいまでですが、そういったいろいろなチャンスもあると思いますので、是非、事前に行い、オリンピックでさらに体験して、それをオリンピックで終わらないで、できれば継続的にレガシーとして残るようになって欲しいと感じています。

私は、中学、高校がキリスト教の学校に行っていたものですから、クリスマスとかキリスト教の記念日に老人ホームであるとか、障害者の施設を回って、何をするというわけでもないですけど、お伺いして一緒にお話したり、あるいは掃除をしたり、いろいろな活動をやらせていただいた経験があって、そのことはその後のやはり人生の中でもすごく大きな影響があると思っていて、人のためあるいは社会のために自分以外の人のために何かをすることの喜びであるとか、あるいは障害をもっている人たちを理解する力であるとか、いろいろなものに繋がっていくのかなと思います。

オリンピックを契機にこういったボランティアをしていく子ども達が増えることによって、生きがいであるとか、目標だとか、夢であるとか、いろいろなものに恐らくつながって行くのではないかなと思いますので、是非、積極的に御協力いただけたらありがたいと思っております。

○事務局（都市戦略本部総合政策監）

それではただいまの件につきまして御意見、御質問等はございますか。

○細田教育長

市長からいただいたお話については教育委員会としても、是非さいたま市の子ども達にボランティアマインド、ボランティアは当然自発的なことですが、その自発性というところに大変教育的意味を感じており、教育委員会全体で取り組みたいと思っております、実は生涯学習部が2019年度、新しい取組を考えております。

それはこれまでも、体験学習について「『自分発見！』チャレンジさいたま」というプログラムを体験活動中心にやっていたのですけれども、それをバージョンアップして「u p」を付けまして、「『自分発見！』チャレンジu pさいたま」として、ボランティア活動をすることに教育委員会を挙げてチャレンジしていく。

少しインセンティブを与えたほうがよいということで、オリジナルのピンバッジを作りまして、ボランティア活動に従事した分だけ、金、銀、銅のまるでオリンピックのようなピンバッジを与えるというような、取組も始まります。今回のこの御提案いただいたプログラムと合致するところがあると思っております、非常に心強く思ったところでございます。

○生涯学習部長

今お話しいただいたとおり、今まで教育委員会では子どもの可能性をもっと伸ばそうという体験活動をメインにやってきましたのですけれども、今度は、自主性、自発性ということで、社会参画をしてもらうため、対象年齢も18歳まで拡大をして、更にはボランティア活動もたくさん情報提供してまいります。

いろいろな形で御協力できると思うのですけれども、その1つに、教育委員会ではボランティア活動を情報発信する冊子がございますので、その冊子の中にオリンピックの先ほど御説明があった子ども向けボランティア体験プログラムも掲載して全校に配布しますとともに、例えば全公民館、図書館にも配布させていただくという啓発活動もできます。

更に、このボランティアの仕組を立ち上げ、子ども達にはボランティアとは何だろうとか、どういう気持ちでボランティアをしたらいいのだろうとか、そういうものもホームページに掲載してまいりますので、先ほどの大会に向けたボランティアマインドの醸成にも寄与できるのではないかと考えております。

○大谷教育長職務代理者

先ほど、市長、教育長からお話があったとおりで、その延長になるのではと思いますが、教育活動上、我々教育を担っている者からいたしましても、学校教育という観点からも、非常にこのボランティアの取組というものが、意義深

いものであると感じております。

まず1つは、さまざまな国の方々とダイレクトで交流できるという、障害のある方も含めて対応性というものです。肌の色が違う、言語が違う、やはり対応性というものが、これから彼らが大きく社会で活躍していくためには身をもって理解していくことが欠かせない資質になるはずなのであります。

それとまた私ども市長部局から大変な御支援をいただいて、大変生きたグローバル・スタディの観点もあると思います。そして、さらには、市長がおっしゃっていらっしゃいましたが、生きた道徳教育で机上の話ではないのです。

自発的ということについては我々、教育者が道筋をつくってあげるような方向が良いと思います。

道筋をつくる中で自発的にということを経験させていく。そして、そのことで、市長がおっしゃる、喜ばれる達成感、もちろんその大前提は安全なのですけれども、安全、安心を我々が確保しながら、その枠組みを作りながらやはり喜ばれて良かったという達成感がその後のマインド形成につながっていくだろうということで、そうした成果を上げるためにも、このボランティア活動の教育課程上の位置付けをある程度明確にしておいた方が良いのではないかと思っています。

教職員がその気になってもらわなければなりませんし、保護者の御理解もいただければならない。

そのためにはちょうど時期が7月、8月、9月です。例えばですけれども、総合的な学習として、あるいは学校行事、さらには特別活動とか、それなりの位置付けをして、学校も教育委員会も膝を突き合わせてでも話をして御理解をいただいて、しっかり、先生方、校長先生に御理解をいただいて、教育課程実施上の枠組みをしっかり作って、そして取り組んでいただくことによって、成果が期待できると思っております。

○野上委員

私は、今回の議題はとても重要なテーマだと思います。と云いますのは、当市ではこの4月1日に大宮国際中等教育学校が開校します。その中等教育学校の今後のカリキュラムを拝見しますと後期課程では、IB (International Baccalaureate、インターナショナル・バカロレア。国際バカロレア) のプログラムが組み込まれています。このプログラムでは社会奉仕など自分の住んでいる地域の行事やボランティア活動に自発的・積極的に参加することが求められています。こうした取り組みが求められている学校の設置を当市は選択したわけです。

したがって、先ほど大谷委員がおっしゃられたようにこうした活動がカリキ

キュラム・教育課程に盛り込まれなければこの学校をつくった意義はないと思うのであります。しかし、幸いにして当市では市長の強いリーダーシップのもとこのような活動が展開しやすい環境、つまり市民を巻き込んでの行事、例えば国際的な催事やグローバル化に資する数々の取り組みが展開されております。そこで、大宮国際中等教育学校が開校するこの機にこうした機運を醸成するためスポーツ文化局や教育委員会と云った特定の部局だけではなく全市を挙げ取り組むことが一層重要になってくるのではないのでしょうか。

○清水市長

今、いろいろお話をいただきました。本当にありがとうございます。

そういう教育のカリキュラムというか、何らかの形で位置付けていただくことでより効果が高まるのではないかと考えています。

私もタイの難民キャンプや、災害の時のボランティアに行ったりしましたけど、ボランティアはまさにアクティブラーニングそのものなのですよね。自分がどう主体的にその物事に関わって、ボランティア活動をやると、もちろんこれやってください、あれやってくださいという受け身で対応することも稀にはあるのですが、でもやはり、そういったものに積極的に参加されている方々は、どうやったらそれをもっと良くできるのだろうかとか、自分はその中でどういうことをやって貢献できるだろうか、いろいろ考えるのですよね。

それが非常に前向きに、また、主体的に物事を捉える訓練がすごくできたことを記憶していて、その時の経験がいろいろな場面、いろいろな所に行っても、この場面の中では自分はどんなことをしたら良いのだろうか、どういうことで貢献できるだろうか、あるいはこのプロジェクトを良くするにはどうしたら良いかという発想につながっていったというつたない経験がありまして、アクティブラーニングという視点からのボランティア活動は、すごく重要。

そして、何かをしたら必ずその何かの反応が目の前で起きるということが、特に感受性が強いときにこそ有効というか、教育力、教育的な力を発揮するものではないか。

誰かが何度も口で教えるよりも自分で体験し感じたことというのは、頭で捉えるよりもっと大きなインパクトがあったり、その後の生き方、生き様であったり、生きる力であったり、まさに自分には良い所があるということに結びついたり、夢や目標というものに結びついたり、自分自身の存在感であるとか、生きる力になってくるのではないかなと思っております。

オリンピックというそれをしやすい環境があるので、その前くらいから取組を始めながら、オリンピック、それからオリンピックのレガシーとして、またグローバル・スタディを積極的に取り組んでいるさいたま市としても、是非、

そんな取組ができれば素晴らしいと思います。

○武田委員

私からは保護者の立場として、今度できるボランティアのワーキング・グループにお願いしたいことがあるのですけれども、アジェンダの中に1つ入れておいていただきたいと思うのが、創出されたレガシーを市民でシェアできる仕組みというのができれば良いのではないかと。

そのボランティア体験は、市民文化としてのレガシーを作り上げるということに加えて、先ほどからお話ありましたように教育活動としてはいかにフィードバックが必要であるかということもあると思うので、実際にその子ども達が具体的にどういう体験をして、どういうことを考えたり、学んだり、どういうことが問題だと思ったか、そういう学びというのを子ども達同士だけではなく、それを見守っている親とか地域の方々も共有できるような仕組みにすると、子ども達が育つ様子を見守るということと、子どもから学ぶことを大人も両方できると思うのです。

全体が終わったあとだけじゃなくて、今、市長がおっしゃいましたようにやりながら考えるというか、途中のインプルーブメントもシェアでき、実際活動中でもお互い知恵を出し合う事をする、やりながらどんどんグレードアップしていくという育ちを自分で感じることもできたり、まったく自分と違うことをやっている人からヒントをもらえたり、いろいろな学びが可能になるのかなと思います。

国際ジュニア大使とのカップリングもきっとできるのではないかと思いますので、そういう子ども向けボランティア体験プログラムの中にこういうことに困っているのだよと言える場所があるというのは、今のSNSをやっている子たちにはすごく心強いことだと思いますし、自分だけ孤立してどういうふうにしたらいいのだろうということに対しての恐怖感や不安も持ちやすいところもあるのかなと思うので、一人で参加するのではなくてみんなに参加する、場合によってはもちろん親にも相談はするけど、いろいろ実際にやっている人達と相談できるというか、みんなで取り組むというスタンスでできるような形を何かしら考えていただくと、子どもだけじゃなくて親も地域も市全体として教育効果が高く、心の中に残るレガシーとして大きいものになるのではないかと思います。

具体的にどうするかはなかなか大変かと思うのですけれども、そういう方向で何かできないかということを考えていただけたらと思います。

○清水市長

例えば、子ども向けボランティアとか資料の10ページのところにもありますが、花を飾ること、清掃活動についても大切ですが、合わせて、そこにきた方々にどういうふう感じてもらったとか、そういうことが子ども達に発信ができ、あるいは伝えられるともっと効果としては高まると思います。

例えば、私達がこういう思いでお花を植えてこういうふうやって皆さんをおもてなしするとか、メッセージカードを差し上げたり、SNSで発信したりする。それを見てまた感じた人が何かを子ども達に返してもらったりするという双方向的なところもできるとよい。何となくやってしまうとやはり効果としては薄くなると思うのです。

ボランティアは、自分たちの目の前で反応として返ってくるのが、やりがいであったり、モチベーションであったり、あるいはやって良かったなことであったり、継続性であったり、そういったものも生まれてくるのでは。

単に関わらせるだけじゃなくて、市民でも良いし、来場してきてくださったお客さんでも良いし、外国人の方でも良いし、いろいろな形で子ども達がやったボランティアに対して、なにかフィードバックができるように、プログラムとして考えるのであれば、是非、そういったところも考えて欲しい気がします。

○細田教育長

今ので、ヒントをいただいたのですけれども、教育委員会の取組として一校一国運動を計画しております。

市長がおっしゃったとおり、ボランティアは基本的には見返りを求めないものですが、ただ、目の前に、もしくは、ボランティアで関わった人がニコッと笑ってくれただけで、すごく満たされるというか、こんな素敵なことがあるのだと思えるのです。

それでその不特定多数に対するボランティアは、ちょっとつかみどころがない可能性もあるのですけれども、一校一国運動で、具体的に例えば、さいたま市〇〇小学校はSNSを使って、その担当する国に対して豊かなメッセージを送る。実際にその国から1人でも2人でもおいでいただいて、その方々をおもてなしできるとこんな明確なフィードバックはない訳で、ですから一校一国運動とのコラボというの、当然その言語は、共通言語は英語になりそうですので、グローバル・スタディの成果も発揮できると、1粒で何度も美味しいみたいな感じになるかなと思いますので、そんなコラボもいいかなと思います。

○事務局（都市戦略本部総合政策監）

それでは最後に、会議の主宰者である市長から追加で御意見等ございました

ら、お願いいたします。

○清水市長

具体的な、建設的な御提案がいっぱいありましたので、是非、オリ・パラ担当部局もそうですし、教育委員会と是非、具体的な相談をしていただいて、せっかくやるのでより効果を高めて行けるような、次にまさにレガシーとしても残せるような仕組みを、さいたま市らしいオリンピックへの取り組み方をさせていただきたい。

○事務局（都市戦略本部総合政策監）

それでは次のテーマに移りたいと思います。

「市立高等学校「特色ある学校づくり」計画の推進 浦和南高校のPLAN THE NEXT スポーツを科学する生徒の育成」について、教育委員会事務局から説明をお願いいたします。

○学校教育部参事兼高校教育課長

資料3により御報告申し上げます。

「市立高等学校「特色ある学校づくり」計画の推進 浦和南高校のPLAN THE NEXT」として、「スポーツを科学する生徒の育成」について、お手元の資料を基に説明いたします。

2ページを御覧ください。

まず初めに「市立高等学校「特色ある学校づくり」計画の浦和南高校におけるグラウンドデザイン」について、説明いたします。

第1期特色化計画では、「単位制に近い類型形の教育課程の実施」及び、「小中との強い連携を持つ地元根ざした」地域連携型高校と位置付けました。

第2期特色化計画では、教育課程の改革を更に進め、平成25年度からは「進学重視型単位制高校」へ、また平成28年度には、サッカー伝統校としての実績を踏まえ、グラウンドを人工芝化しました。

第3期特色化計画では、平成30年度に「コミュニティスクール」のモデル校となり、地域連携型高校としての取組を進めるとともに、新たに「スポーツを科学する生徒を育成する」ことについて取り組んでいるところでございます。

そこで、浦和南高等学校では、スポーツを科学する生徒を育成する取組を推進するため、浦和南高校プロジェクト体制を構築しました。

3ページを御覧ください。

では、現在の浦和南高校のプロジェクト体制について説明します。

今回のプロジェクトはNTTデータを事務局とした、「Sports-Te

ch & Business Lab」というコンソーシアムの活動の一環で行われています。

このコンソーシアムは、「デジタル時代に即した次世代スポーツビジネス、周辺産業や地域と連携したスポーツビジネスエコシステムの創出を目指す」というコンセプトで構成され、さいたま市は全体のサポート、浦和南高校は対象となる生徒や施設の提供という形でこのコンソーシアムに参加しています。

4ページを御覧ください。

次に浦和南高校が、このコンソーシアムのSports-Tech & Business Labと連携するに至った経緯について説明します。

浦和南高校は、「スポーツを科学する生徒の育成」として、「自ら問いを立ててその解決を目指し、多様な人々と協働しながら、様々な資源を組み合わせる科学的なアプローチから解決に導いていく力の育成」を目指しておりました。一方、Sports-Tech & Business Labは、「異分野・異業種の連携、産官学の知見・技術の融合により、デジタル時代に即した次世代スポーツビジネス、周辺産業や地域と連携したスポーツビジネスエコシステムの創出」を目指しておりました。

このように、お互いの目指すものが一致したため、協力することになった次第でございます。

5ページを御覧ください。

具体的に、どのような科学的アプローチをするか、3つの取組を紹介します。

1つ目は、「AI GROW」です。

これは、AIを用いたアプリを使うことによって、「個人の生まれ持った潜在的な性格」である「気質」や「課題設定力」、「解決意向」といった「コンピテンシー」を測定し、数値化することにより、生徒の資質・能力と活動の効果を可視化してゆくものです。

実証実験をする前と後に実施し、生徒の資質・能力の変容を見ることができます。

6ページを御覧ください。

2つ目は、「Splyza」です。

写真は、SPLYZA社が提供している「Splyza Teams」です。

これはSPLYZA社がゲームを撮影し、プレー毎に「タグ付け」された映像を、生徒がスマホで共有するソフトです。

映像を通して生徒同士でディスカッションすることで、自分達のプレーや戦術について「言語化」、「課題発見」、「課題の共有と対策の検討」を行い、その結果を「戦術や練習の改善」につなげます。この一連のサイクルを生徒自身が行うことで、生徒の「課題発見能力」、「課題分析能力」を育成していく

ものです。

これが、今回の検証のメインとなるものでございます。

7ページを御覧ください。

3つ目は、定性アンケートの実施です。

このアンケートでは、「プロジェクトの前後における生徒の変化」と「生徒の部活動への関わり方や意識に関する変化」を測定することを目的としています。

具体的な項目としては、「組織または個人における部活動に対する意識・満足度等について」や「自分またはチームにおけるプレーの課題について」等があげられます。

これも、「A i G r o w」と同様に、実証実験をする前と後に実施し、生徒の資質・能力の変容を見ることができます。

8ページを御覧ください。

次に、実証実験の全体的なイメージについて、現在までに行ったものとこれから行うものを説明します。

まず、事前の生徒の状態を把握するため、A i G r o wと定性アンケートを実施しました。

現在、女子バス部15名、サッカー部90名が、S P L Y Z Aを使用して部活動に取り組んでおります。

また、それ以外の部活の生徒は、「S P L Y Z A未実施群」として、通常の部活動を実施しています。

平成31年4月を目途に、A i G r o wと定性アンケートを再度実施し、S P L Y Z Aを実施した生徒と、S P L Y Z A未実施の生徒を比較し、それぞれの変化を考察しS P L Y Z Aの有効性を検証します。

9ページを御覧ください。

最後に連携、協力をお願いしたい事項について、説明いたします。

これまで説明させていただいたように、「スポーツを科学する生徒の育成」について、現在S p o r t s - T e c h & B u s i n e s s L a bと浦和南高校が行っている実証実験はきわめて有効であると考えます。

そこで、S p o r t s - T e c h & B u s i n e s s L a bにおけるさいたま市の窓口となっているスポーツ政策室に、今後も実証実験が継続的に実施できるよう、現在行っているS p o r t s - T e c h & B u s i n e s s L a bとの事業の継続的なサポートについて連携をお願いしたいと考えております。

また、実証実験の発展的なサポートとして、スポーツ科学、データ分析、栄養、心理等に取り組んでいる企業や大学等の学術機関の紹介について、連携を

お願いしたいと考えております。

私からの説明は、以上でございます。

○事務局（都市戦略本部総合政策監）

ただいまの件につきまして、細田教育長から補足などございましたらお願いいたします。

○細田教育長

よろしくお願いたします。お手元にA4の大きな参考資料ということで、用意させていただきました。

皆さん何度もみたことがあるかもしれませんが、市立高校の特色ある学校づくり計画の市立高校全体のグランドデザインでございますが、平成19年度に市立浦和高校に併設型中高一貫教育校、浦和中学校が開設をすることで第一期特色化計画がスタートしたことを皮切りに、これまで10年以上かけて、第二期特色化計画そして、いまの第三期とつながっていくなかで市立高校4校がそれぞれもともとその学校が持っていましたポテンシャルや特徴をさらに具体的にすることによってさまざまな特色を出すことに成功してきております。

大変嬉しいことで、その中で浦和南高校については、地域連携、地域と非常に密接なつながりがある、市立高校でございましたので、そのことをベースにしてすこしずつ特色を出してきました。

大きな取組としては、サッカーも大変有名校でございますので、グラウンドの人工芝化をして、そしてそれを地域の方々にも使っていただくという取組をここまで進めてきたところでございますが、ただ、他の三校に比べますと、学校そのものの大きな改革というのがなかなか進みませんでした。

非常に魅力的でポテンシャルの高い学校ではありますけれども、その辺のところもうひとつ分かりにくいという声もございまして、そこにいよいよ時代の転換点を迎えて新しい学習指導要領が告示されまして、単に知識を習得、獲得するだけではなく、実践を伴う社会とつながった学び、これが期待されることとなりました。

それに合わせて、文部科学省が次の教育改革は高校の普通科校をどう特色を出していくことか、ということを大きく打ち出しを始めました。

そこで、浦和南高校が持っているポテンシャル、これはもう、スポーツ、地域、そして、押すに押されぬ進学校であるというこの3つの要素を合致させたところで、スポーツサイエンス、そのスポーツサイエンスからさらに発展させますと、またもう一つ国が大きな教育改革をして、「STEM教育」、S c i

ence、Technology、Engineering、Mathematics、これに最近では、A、Artを加えた表現ですね、「STEAM」という教育も盛んに文科省、国を挙げて声高らかに提唱しております。まさに浦和南高校以外、この取組に合致する学校は無いのではないかというくらいの思いを持っているところでございます。

そこでは、それこそ、産学官連携で、このような、先進的な取組でスタートを切らせていただいたところですので、特色ある学校づくりのPLAN THE NEXTについては部活動という切り口ではなく、これをその浦和南高校の学校改革の中にどうやってスポーツとサイエンス、それからヘルス、健康とサイエンス、そしてスポーツと心理というものを取り入れていくかということを考えていきたいと思っております。

今日は、是非、総合教育会議の中で浦和南高校のそういったドラステックな改革に向けた最初の一步の議論ができたらいいなというふうに思っております。

○事務局（都市戦略本部総合政策監）

ありがとうございました。それではただいまの件につきまして御意見、御質問等はございますか。

○清水市長

市長部局では、さいたまスポーツコミッションを昨年の12月に正式に立ち上げまして、4月1日から実質的に稼働していくこととなります。

その中でスポーツシューレという事業を行っていく、NTTデータ、浦和レッズ、大宮アルディージャ等も含めまして、あと埼玉大学など官民連携で、スポーツシューレという事業を行っていくと考えています。

スポーツシューレのまさに目玉は、浦和南高校で推進しているようなスポーツ医学であるとか心理学など、データ分析をして、今まではどちらかというスポーツ界は根性ものだったり、ある特殊な指導者がそれぞれ独自のノウハウを持ちながら、それをエネルギーと、そのノウハウを活用したりしながら強化をするというやり方だったと、ざっくりいうとそういう感じだったと思います。

それをいかに科学的に、コーチングを含めて、やっていくかということ、さいたま市としてもスポーツで地域を活性化していくという大きな目的のために、そういった取組をしようということで、横浜DeNAの初代の社長だった池田純さんが代表になって取組をスタートすることになっていて、来年度は女子サッカーについてサッカー協会などと連携しながらやっていこうとしています。

もう一つ、私達はできれば、教育現場でいかにこれを生かしていただくか。さいたま市の教育のやっばり大きな柱というかですね、「知」・「徳」・「体」・「コミュニケーション」の4つの力を高めると、それで比較的、「知」・「徳」・「コミュニケーション」あたりは非常にいいなと思っておりますが、「体」のところ若干まだ、課題があるかなという感じも持っておりますので、スポーツを特別にやっている子ども達もそうなのですが、そうじゃない子ども達へもしっかりとそのノウハウを活用して体力を向上させたりすることができないかという思いであったり、あるいは逆に、スポーツで夢を実現していきたい子ども達により力をつけさせていくというようなこと取組や、そのことをやればと、市長部局側でもそんな思いをもって今、スタートしたところですので、そういう意味では、一つはその浦和南高校を舞台に、こういった取組をさいたま市スポーツ政策室もそうですし、スポーツコミッションなどとも連携をしながら、そういった取組をやっていくことについては大賛成でもあります。

例えば、人工芝を地域に貸し出しをしているのか、検討しているのか分かりませんが、例えばその浦和南高校をベースに総合型地域スポーツクラブみたいなのを作っていただいて、自分達の部活動も良くしていくけれども、そのノウハウを子ども達や下の世代に伝えていただくようなこともいいのかなというふうに、アイデアのレベルですけど、思ったりします。

今回、大宮国際中等教育学校で色々な形で教育関係、UPMC (University of Pittsburgh Medical Center)、ピッツバーグ大学の病院のメディカルセンターですが、スポーツ医学が非常に進んだ大学であって、ピッツバーグ・スティーラーズやピッツバーグ大学のアメリカンフットボールのトレーニングとか、指導を総合的にやっており、脳震盪の権威の先生がいらっしゃるんですけど、そういったところと連携をしてやっていくということもあると思います。

日本全体としてもいま「日本再興戦略」の中でスポーツビジネスの拡大、5.5兆円を15兆円くらいにしようといった戦略もある中で、スポーツそのものの、これから少子高齢化の中での活用の仕方となると、かなり重要なテーマになると思いますし、教育という視点からも非常に重要なことになってくるのだらうと思いますので、市長部局の方で取組をやっていきますから、是非、連携をして、色々な取組ができて、それでデータをたくさん集めていくことによって、よりしっかりとした分析ができて、またそれを活用することができるという良い循環ができてくるのではないかと思うので、今日はスポーツ政策室も来ていると思いますので、これからも一緒に取り組ませていただきたいと思います。

○事務局（都市戦略本部総合政策監）

ほかに御意見、質問等はございますか。

○大谷教育長職務代理者

いま市長さんの言葉で、結論めいたというか、大変失礼ですけれども、そのとおりであるというふうに思う訳であります。

確かに浦和南高校の全国的な高等学校でも例を見ない人工芝ですね、これをもっと活用というか、それを起爆剤にしてもっともっと浦和南の特色というものを明確に打ち出すべきなのだろうと、そうせねばならないと私自身も認識しております。

子ども達は非常にいい生徒さんが集まっております。非常に、教育長さんがおっしゃっていたように、ポテンシャルがある子ども達、スポーツという観点、それもですね、単なる精神主義とか、先ほど市長さんの根性というお話ありましたが、そういうことじゃなくて、科学的という、一昔前、IT革命なんて言葉がありました、先日はもう日経新聞にデータ革命の時代、データ、全てデータですよという記述がありましたけども、そういった意味で、そのデータに基づく、あるいはその前のこの事業自体がAIを取り込んだアプリで、ですね、そして、アプリを生徒のスマホに取り入れるわけですよ、それをもって、生徒がそれを使って、自らのプレーを分析できる訳です。

ですから、戦術の向上、戦い方ですよ、戦術の向上とか、そういうことも役立つ勝利に結びつくかもしれないですけど、もっとも狙いが先にあって、やっぱり課題というものを自ら見つけてですね、どこに問題があるのだろうかという、課題解決の能力、どこに課題があるのか、課題発見能力と言いましょかね、そしてそれを自ら考えて課題を解決に導いていくという、これももちろんいわゆる大事な学びの方法だと思うのですが、そういう中で合わせて子ども達が将来にわたって、そういう自らの人生を切り開いていく力にまで結びついていけば、自らの課題も自らで、そして解決して、自らの道を進んで行くという、それを含めて生きる力と言えるかもしれませんけども、そうした力まで身につけられれば良いなというふうに考えております。

あわせてそうした市長部局で進めていただいておりますスポーツシューレと更なる連携ができるのか、密接な関係が結べるのか、これのところはやっぱりもう一歩考えていかなければならないという認識をしたところであります。

いずれにいたしましても、非常にもう、NTTデータが事務局というか、総合的な取りまとめの役で、まさに産学官の連携ですね、これ本当に何と言ったらいいのでしょうか、大いに誇れる取組かなというふうに思っております。

市長さんを先頭にした市長部局の皆様の御支援、御協力をいただきながら進めていかなければならない、そんな思いを強くしたところでございます。

○柳田委員

私、スポーツをしていた者としての意見なのですが、スポーツと科学は一見離れているような感覚ですけど実はすごくリンクしておりまして、それこそ市長さんがおっしゃいました昔は根性だったり気持ちだったりで解決していたことが多かったんですけど、今でももちろん一番大事なものは気持ちとかそういうところだと思います。

今、サッカー界はデータ化が進んでおりまして、分析、スプリント回数、その試合の中でここが一番使われている、どっちサイドから攻められていると、もう分析の時代になっています。

私もどちらかという遅れている方で、気持ちとかそういう根性でやってきた者としては、今こんな時代なのだというのがすごいびっくりしまして、中には分析力に長けた選手もいますけど、基本は分析とかデータ化という作業は指導者が行っています。

それが選手の時から学べるというところで、選手としての幅が広がりますし、こんな言い方をしたら悪いかと思いますけど、選手、生徒がそれをできることによって指導者が要らなくなるといいますか、どんどん自分で発展していけるのかなと、この話を聞いて思いました。

そうすると指導者としてはもっと努力しますし、その子ども達にもっと良く教えなきゃいけないところできっと学ぶ、というところで、この先生も生徒もよりどんどんレベルが上がるのかなと思いました。

皆さんおっしゃったとおり課題に取り組んでいるときは本当にこれであるのか不安になることも多いかと思いますが、そういうデータとかがあると違う側面から見られることで整理・発見ができて、どうしたらこれはいいのだろうというふうに考えますし、考えたあとにどうしたら解決できるのだろうというところでまたトライして、それがもし成功したならその時の自信というのは、それはすごい大きな力だと思います。

そう自信がつかますと、どんどんチャレンジしようというふうな、意欲が出てきますので、今までは気持ちだったり、根性だったりというところプラス、データを使って違う側面で見られるという活動は素晴らしいことで、正直、羨ましいなと思うところなので、御協力をいただきながら、これはどんどん進めてもらいたいなと思いました。

○大谷教育長職務代理者

一つどうしても、これは私どもがやらなければいけないことなのですが、今までのお話の中身で一番大事なことは、まずは教職員に本当に理解してもら

うということ、これは我々の責任だと思うのです。

浦和南高校の教職員の皆様で、校長を先頭にした教職員の皆様方に、いかに徹底的に理解してもらって、その気になってもらってやらないと、なかなかどうも学校という良くも悪くも体質上、なかなか実績を上げることが難しいということで、そのところは我々が心して取り組まなければいけないだろうということだけ付け加えさせていただきます。

○細田教育長

実は、浦和南高校の教職員の中からもやはり声が上がっているのです。

もっと何か次の一手が、スポーツを核にした学校づくりに何か次の一手があるのだけれども、それがその「個」の考えで、それが「ムーヴメント」にならない、その訴えを私はいただいたりしているので、それは教育委員会の役割だなというふうに思います。

これをどうやって一人一人「個」の力を結び付けて「ムーヴメント」にしていったら、こういった素晴らしい取組を学校全体の取組、そして、もっと言えば、もっと進めて、私自身は、こういったこれから本当にスポーツ医学やスポーツ心理などスポーツとサイエンスがどんどん結びついて行って、ビックデータを分析していく力を、高校生は義務教育から社会につながって行くちょうどクッションのところ、また、浦和南高校のような進学校ですと、それはその大学への学びにどう繋いでいくかということ、これを高校の使命として、そして大学でそういったスペシャリストになって、さいたま市の中でどんなふうにフィードバックしてくれるのかということまでを見越した、特色ある学校づくりに結び付けていければなというのを理想としております。

○武田委員

いま教育長がおっしゃったことと基本同じことを保護者の立場から申し上げたいと思うのですが、やはりスポーツと科学というのは何しろ先進的な部分ですので、まだ保護者の理解がつかないというか、そういうところもあるかと思えます。

今回、サポートしてくださっている、例えば早稲田大学のスポーツ科学部ですとか、慶応義塾大学のメディアデザインだとか、そういうところではもうかなり進んでいたりして、県内でも大学の中にはスポーツ健康学部ができたとかいろいろなところでまさに進んでいたりしているところなのですが、世代的にまだ親世代はよく分かっていない。

勿論分かっているご家庭もたくさんおありだと思うのですが、そういうところもあつたりしますので、こういうことを子ども達が学ぶことが、いかに自

分の子どもを成長させることなのかということについての納得というのは、ちょっと大切な部分なのかなと思います。

今回の浦和南高校のプロジェクト等を進めていくなかで、一つ大きい視点として、進路というのは、今、大学のお話にも出ましたけれども、大事なことで、もちろん関連する「スポーツ」とか「健康」とかの学部に進学するだけじゃなく、今までお話にありました、問題解決能力というのをつけていくということは全員に大切なことなのですけれども、例えばそれはどのような進路に進むにしても、浦和南高校を卒業するというふうなことで、「知性」と「健康」が両立した形で生活デザインができる、それが、さいたま市の言っている人生100年時代の生き方に一つの大きい光を与える。

大きいビジョンがあると、それはそういう子どもを育てるのだということが浦和南高校のアドミッション・ポリシーになって、中学生の皆さんにうちはこういう生徒が欲しいです、ということに繋がると思うので、そういう意味では浦和南高校を受験するその保護者に対しても、在学している保護者に対しても、一つ自分の子どものやっていることに、やっぱり特に部活動は家庭の協力も必要なので、そういう形で家庭の力も巻き込んでするということができるのではないかなと思いますので、ある意味大きなビジョンというのは何というか、机上の空論みたいな感じがありますけど、やはりそれがあって初めて進んで行くプロジェクトだと思いますので、その辺りの理論的な部分で、学校の方針として、スポーツを科学する生徒を育成することでどういう社会人、どういうさいたま市民を作っていくのかというところが、もう一つ踏み込んだ形で広めていければ良いのではないかなというふうに思っています。

○野上委員

只今、武田委員からアドミッション・ポリシーの話がございましたが、私もそれぞれの高校がしっかりしたアドミッション・ポリシーを持つことが極めて重要なことだと思っています。なぜなら当該学校がどのような生徒に入学して欲しいと方針を示すわけですから、受験選択時の貴重な判断材料になりますので、世の中によくある七五三現象などの選択違いも極めて少ないのではないのでしょうか。

さらに、アドミッション・ポリシーを示したからにはポリシーで示した内容の教育を遂行しなければなりませんので、次に必要なのが教育課程上のカリキュラムの編成方針、つまりカリキュラム・ポリシーの構築こそが極めて大事になってまいります。そうした過程を経て卒業時には、これこれしかじかの知識・技能を身に付けさせますよといった質保証の方針、ディプロマ・ポリシーを各学校が持つことが特色ある学校づくりに求められているのではないでし

ようか。

しかし、当市では少なくとも横文字表現はともかくこの「三つのポリシー」の教育方針の下で四つの高校運営がなされていると思います。その好例が本日取り上げられた浦和南高校であります。同校がスポーツ振興校であることは既に多くの人の知るところです。それが証拠に在校生はもとより卒業生は多くのスポーツ分野で大学や実社会において活躍しています。そればかりか更に多くの先輩たちが指導者やスポーツ界の重鎮として名を馳せ活躍されています。こうした実績が一朝一夕に成就することはなく長年にわたって「三つのポリシー」に基づいた教育が実践されてきたからこそ得られたものと思っています。

同様に他の三校も「理数科教育」、「一貫教育」、そして「グローバル教育」を教育目標に掲げ、これまた「三つのポリシー」に即した教育を展開してきたことで、それぞれの学校が特色ある教育校との評を得ているのではないでしょう

か。

このようなメリハリあるさいたま市教育が世の中で評価されたからこそ、この度の大宮国際中等教育学校の開校に際しては160名の募集に対し千何百名の受験者、そして説明会においては数千名の参加者があったと思っています。

そこで、今後ともこうした方針を堅持・拡充するとともに全市を挙げ取り組み日本一の教育都市の実現を図ろうではありませんか。

○事務局（都市戦略本部総合政策監）

ありがとうございました。他に御意見、御質問等はございますか。よろしいですか。

それでは最後に会議の主宰者である市長から御意見等ございましたらお願いいたします。

○清水市長

色々、教育委員会からの御提案をいただき本当にありがとうございます。

非常に積極的な、前向きな浦和南高校の取組について、私ども色々な形でサポートしていけるようにしていきたいと思います。

また、スポーツを科学する生徒の育成に関して、環境づくりを整えていきたい。

その中でスポーツ施設の整備、ハード面での整備について、市長部局で計画をしているところなのですけれども、もちろん新しいスポーツ施設を作るという考え方も当然ある訳ですけど、ただもう一つは、既存の施設を最大限に生かすと。

これからの厳しい財政状況で、中長期的に見ても色々なハードをどんどん作

っていくという時代ではない中で、いかに既存のスポーツ施設をより有効に活用していくか。当然、スポーツ施設整備計画の中で合わせて飲み込んでいくと。

新しい物を全く作らないということではなくて、既存のもフル稼働させる、かつ、それでも足りない部分は当然あるかと思imasるので、いま高齢化の時代で特に高齢者の皆さんが非常にスポーツをする時代になって、高齢者の人は週1回スポーツする人は7割くらいを越えているのではないかと思いますけど、そういう時代になってきていますので、より一層、そういったものの必要性を私達も感じていて、改めてそういったつくりをしようと思っております。

その中でももちろん、既にあります大きな体育館とか運動公園、大きな公園もありますけど、もう一つは身近な場所に、実を言うところと小学校、中学校、校庭があったり、体育館があったり、あるいはプールがあったりするわけです。

現状としても、校庭、体育館やプールもそうなのだろうと思imasますが、学校教育の支障のない範囲で開放されているというふうにももちろん認識しているのですが、より一層それを高めて活用するのを、あまりその遠く離れたところまで行かないとスポーツができないという億劫になってしまimasるので、小学校、中学校のある範囲、距離ぐらいの中でそれができるとより一層、そういう機会も増えていくと思imas。

今後、体育館のリニューアルがあったり、プールのリニューアルがあったり、色々な課題も合わせて、教育委員会の方で課題を考えていると思imasますが、その時により一層、学校教育で中心的に使うのはもちろんですが、それを例えば、地域に活用していただく手法なども合わせて検討していただくことで、市民からするとスポーツ施設がもしかしたら倍ぐらゐに増える。使える時間とか、そのくらいになるくらいの可能性があったりするのではないかとこのように思imasし、また、プールについて言うところと、色々教育委員会と議論をいただくことになると思imasますが、今のところ一定の夏場のほんの短い期間しか現状としては使えない状況があつて、これをもっと活用していくためにはそうすればいいかということも当然あろうと思imas。

北本市の場合は、民間のスポーツ施設に行つて練習するのもあるみたいですが、夏以外の時も、本当に泳ぎができるようにするためには夏だけやったのではもしかしたらダメかもしれないし、そういったことなんかも含めて教育委員会の学校施設などとも連携をさせていただいて、スポーツをできる場所を私達としては増やして行きたいと思imas。

そのことで結果的にPFIだとか、色々な手法も活用しながらやつていくことで、改修のコストも削減したりすることも可能になるのではないかとこのように思imasので、是非、これらについても教育委員会とスポーツ関係施設もそうですし、大きなところだと公園なんかでも都市局と連携するのも知れま

せんし、いずれにしてもそういった面も含めて、やらせていただけるとありがたいというふうに思っておりますので、そこも合わせてですね、お願いしたいと思っております。

○細田教育長

ありがとうございます。今さいたま市内にあるスポーツ施設という着眼点で言いますと、学校の持っている体育館、プール、アリーナが数的には一番多いし、合わせて老朽化も進んでいる。

市長さんがおっしゃっていただいたとおりに、このあと教育委員会としては施設整備が老朽化していく中で、無尽蔵にお金をかけられない中で、どういう形でやっていこうかと頭の痛い問題です。

今おっしゃっていただいたように順次古くなってきて、かつ、これは市民の皆様非常に便利な施設であるということにもお答えできるような、そういう長期的な計画を、是非、一緒に考えさせていただきたいというふうに思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

5 その他

○事務局（都市戦略本部総合政策監）

議題につきましては、ここまでとさせていただきます。

次に、「次第4 その他」ですが、次回開催予定につきまして、例年どおり来年度の8月前後に次年度の第1回会議を開催させていただき予定でございます。

また、総合教育会議につきましては、個別事案、突発事案への対応も所掌事務としてございますので、そのような事案などが生じた場合には、その都度対応させていただきたいと思っております。

今日の議論も含め、この他、何かございますか。

それでは最後に、会議の主宰者である市長から、本日の会議の総括をお願いいたします。

○清水市長

本日は、「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けたオリ・パラ教育の推進」の議論と合わせて、浦和南高校を中心とした「スポーツを科学する生徒の育成」について議論させていただきました。

お互いに協力し合うことで、それぞれが目指していることの政策的な質が更に高まることになるのではないかと思います。

そういう意味ではオリンピック・パラリンピックのボランティアへの参加についても、単にこの時期にボランティアに参加するだけではなく、子どもたちに色々な学びのチャンスを持ってもらい、それがレガシーとなって、さいたま市らしい、アクティブラーニングの一つのモデルになって欲しいなと思っています。

併せて、浦和南高校でやっている取組は非常に面白いと思いますし、まさに選手が主体的に運動するだけではなくて、考えて行動すると。また、現状の自分たちを分析し、あるべき姿にどう持っていくのか、課題解決にもつながっていくということにもなります。

そういった機会を私たちとしても、教育委員会のやっている良いところを、市長部局の中にも取り込んでいく、市長部局でやっている取組を教育委員会にも反映させていくということ、子どもたちの教育であるとか、生涯学習にもつなげていくことも重要だと思います。

これら取組は、非常に具体性があるなと感じました。

今日は所管部局も聞いていると思いますので、是非、積極的に教育委員会と市長部局との連携をよろしくお願ひしたいと思います。

6 閉 会

○事務局（都市戦略本部総合政策監）

教育委員の皆様、本日はお疲れさまでございました。

本日は、「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けたオリ・パラ教育の推進」と、「スポーツを科学する生徒の育成」について大変有意義な議論ができたと思います。連携事業につきましては、これらに限らず多くの分野に多数ございます。

市長部局と教育委員会とが、連携を深めて、事業を推進していくことで、更なる事業効果を生み出せていければと考えておりますので、引き続き、よろしくお願ひいたします。

それでは、以上をもちまして、「平成30年度第2回さいたま市総合教育会議」を終了させていただきます。

皆様、本日はありがとうございました。

以上